

# 國學院大學學術情報リポジトリ

大学院短期招聘研究員講演会紹介：羅  
宏才氏(中国・上海大学中国産業芸術研究院副院長、  
上海大学教授)：  
忘れられている「同文書院-秦隴旅行班(1923-1925)(  
北路、南路)」画像史

|       |                                                                                                        |
|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-07<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 青木, 豊<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/00001438">https://doi.org/10.57529/00001438</a>                      |

## 大学院短期招聘研究員講演会紹介

羅 宏才氏

(中国・上海大学中国産業芸術研究院副院長、上海大学 教授)

# 忘れられている「同文書院—秦隴旅行班（1923-1925）（北路、南路）」画像史

青木 豊

## はじめに

平成27年度國學院大學大学院国際学術交流事業の短期招聘研究員として、2015年（平成27）9月30日（水）から10月30（金）までの31日間にわたり、中国・上海大学羅宏才教授を招聘した。

國學院大學大学院高度博物館学教育プログラムの国際共同交流事業の一環で博物館学研究室は、上海大学と博物館学学術交流を平成21年以来深めている。平成24年には、上海大学付属博物館郭助理を文部科学省予算で招聘するなどの交流を継続的に行っている。今回の招聘による学術交流は、本学の博物館学コースに所属する大学院生の視座の広がりとの研究の刺激となることを目的とするものである。

講義の内容は、東亜同文書院大学の「大旅行」の一つであった秦隴地域旅行を、羅氏が発見した古写真を解説する形式でなされた。東亜同文書院大学（前身の東亜同文書院は、1898年（明治39）に設立、1939年（昭和14）に大学昇格。1945年廃止）は、中国・上海に我が国が設立した日本人の為の高等教育を目的とする大学で、卒業論文作成を目的とする「大旅行」と命名した学生の調査旅行を制度化した特異ともいえる教育を行っていた。大旅行は、数名の学生でチームを編成し、中国全土は勿論のこと東南アジア域にいたる範囲を対象にしていた。

なお、本講演会の通訳は、王娟（國學院大學大学院史学専攻博物館学コース博士課程後期1年）・張哲（同博士課程前期1年）の両名が担当した。

## 博物館学特別講義概要

講 師 羅宏才（上海大学教授）

演 題 忘れられている「同文書院—秦隴旅行班（1923-1925）（北路、南路）」画像史

日 時 2015年10月6日（火）14：30～16：10・同日16：10～17：50

場 所 2304・2403教室

## 忘れられている「同文書院—秦隴旅行班（1923-1925）（北路、南路）」画像史

羅 宏才（上海大学教授）

（邦訳：張 哲）

### 秦隴とは

図1は、現在中華人民共和国の地図であり、テーマ中の「秦隴」と称する場所を地図で示している。つまり、「秦」とは、陝西省中南部ある秦嶺山脈のことであり、「隴」は甘粛省と陝西省が接する位地に座する隴山である。

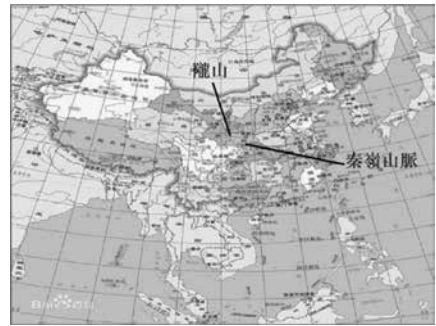


図1 秦嶺山脈と隴山の位置

### 同文書院の前身—東亜同文会と近衛篤磨

同文書院大学の前身は、1898年（明治31）に東京で成立された「東亜同文会」であり、メンバーの多くは当時の中国事情に長けたあるいは深い興味を有する人々の集まりであった。初代会長は、日本において明治時代の著名な政治家であった近衛篤磨（1863～1904号霞山）である。

近衛は、五摂家筆頭の家系で1885年～1890年の間にドイツのボン大学・ライプツィヒの両大学へ留学しており、藩閥政治に批判的で条約励行建議案に同調するなど対外硬派運動を指示した帰国後に貴族院議員、学習院院長、貴族院議長、帝国教育会会長などを歴任した人物であったことは、周知のとおりである。

近衛は、孫文をはじめとする辛亥革命の革命党達と深い関わりを持った人物であったと



写真1 同文書院正門



写真2 出発前の風景

伝えられている。

### 東亜同文会から同文書院へ

1900年5月、南京同文書院が成立され、1901年4月に上海へ移り、「東亜同文書院」と改称された。住所は上海高昌廟桂荘であった。初代院長は根津一であり（1901～1902）、第2代院長に杉浦重剛（1902～1903）を挟んで、再び1903年から1923年の長きに亘り院長を務めた。

根津一（1860～1927）は、山梨出身であり、幼名伝次郎、号山洲である。日本陸軍大学卒業してから、参謀本部のシナ課などに勤めていた。

同文書院は日本の知識をもつ青年達に「幻の名門校」と見なされていた。各府県より学生を2名ずつ受入れ、学生達は官費で3年間に亘り、主に中国語、中国歴史、政治および経済などの課程を修業するものであった。

### 同文書院の大旅行計画

近衛篤磨と根津一は、両者とも同様な「アジア主義者」であり、日本における欧米ブームに強く反対し、積極的に中国の現状を研究するよう主張していた。1902年から毎年、学生達によって「大旅行」といった大学の制度のもとで中国の政治、経済、歴史と地理等々にかんする現地調査を行っていた。

さらに、1907年の第五期目から、外務省より補助金を受けることとなった。そのため、調査旅行の規模はさらに拡大してゆき、調査対象と範囲も中国全土から東南アジアまで一層広がっていった。

最新データによると、1902年から1904年までの間、大旅行計画は計45回実施されており、参加者は5,000人に達し、旅行ルートは700余りがあった。

### 同文書院の秦隴における旅行調査

大旅行に関する研究は、日本籍学者で復旦大学博士薄井山氏によって『東亜同文書院大旅行研究』の一書で披露されている。実施及び行程に関しては、下記の記述は認められるが、秦隴における調査は記されていないことは事実である。

1. 1905年5月15日～1907年4月2日、林出賢次郎らの新疆旅行。
2. 1905年8月3日～1907年6月6日、波多野養作ウルムチ旅行。
3. 1907年「西安班」旅行。ルート：鄭州—潼関—西安—龍駒寨—漢口。
4. 1913年、第11期学生「甘肅四川班」、「秦蜀班」旅行調査。
5. 1915年、第13期学生の陝西旅行調査。

### 薄氏の研究のデータの不足

不具合と思われるのは、1923年（大正12）から1925年までの間に行われていた秦隴（北

路、南路)の旅行調査は収録してされていないことである。

写真3は、1923年同文書院の学生が撮った唐太宗・李世民の陵墓前に置かれていた「昭陵六駿」の一つであり、現在は西安市碑林博物館に収蔵・展示されている。同様に写真4は、同文書院の学生が1925年に訪れた旧灞橋を写したものである。

### 不具合の原因とは

薄氏によるデータは、この「1923～1925秦隴旅行」を収録していない理由として、下記に記す突発事件が起こり、秦隴班旅行は途中でやむを得ず中止となったことである。したがって、旅行で採集した資料も同文書院へ持ち帰っていないと考えられる。

具体的には、1923年の夏、日信、大倉、高橋、三井四つの洋行が秦隴旅行に参加し、古物を買うことを中国人雇員の候明玉に「新秦日報」へ告発された。そのため、関中道尹兼陝西交涉署長南岳峻など地方官員は旅行に干渉し始め、国際法と通商条約に基づき、学生達に「陝西における活動を一切停止し、漢口へ戻るよう」命令されてことに起因するのではないかと推定される。

### 当時の参加者であった加地哲定による記憶

現在、この不具合のすべてを明らかにするには、1925年に秦隴南路旅行班に参加していた仏学に精通する、加地哲定の50年後の追憶を考察しなければならない。

1975年(昭和50)、『高野山時報』創刊号に発表された、加地哲定『古き中国旅行記—秦隴南路旅行』には、下記の内容が記されている。

今日(1925年)やっと憧れの古城西安にきた。——八里(31.2キロ)歩いたら東郭門であり、さらに三里したら長樂門で、中へ入ったら大東街(東大街)である。興慶坊を過ぎ端履門街についたら、かつて日本に留学していた劉東軒先生がいる。(劉)夫人は日本人で、同文書院の学生はみんな集まってくる。顔を合わすには泣くのが免れ難く、懷郷の気持ちが直ちに溢れ、抱き合いながらも涙が止まらない。



写真3 「昭陵六駿」之「青驄」



写真4 旧灞橋

### 疑問に思うこと

1. 1925年、秦隴南行き旅行班の加地哲定などはなぜ、わざわざ西安の端履門街へ昔日本留学していた劉東軒先生と日本籍の夫人にあったのか？
2. かつて、日本へ留学していた劉東軒はどのような人物で、どんな人生の経験があるか？
3. いつ日本人と結婚を？この女性の名前はなに？出身は？どうやって劉と知り合い、さらに夫婦になったのか？
4. 「顔を合わすには泣くのが免れ難く、懷郷の気持ちが直ちに溢れ、抱き合いながらも涙が止まらない」の裏に、どんな物語があるのか？

上記の数々の疑問が残る。

### 劉東軒物語

劉東軒（1878～1948）、字は景坡であり、陝西興平県店張鎮南堡子村出身である。1905年10月陝西师范学堂によって興平県附生の身分として選抜され、日本の法政大学へ官費留学を行っている。1906年に東京で「同盟会」に入会した。1923年に関東大震災が発生した後、劉は故郷に戻り、陝西で初めての弁護士事務所を設立した。後に陝西紅十字会や陝西仏教協会などに勤めていた人物である。

### 劉東軒と日本人夫人

劉東軒は留学していた際に入院したことがあり、その間病院で看護師の関口婦美子と知り合うこととなった。劉は関口婦美子による心を尽くした世話に感動し、両者の中でも感情が生じた。結果として、関口婦美子の妹満喜子の仲介によって、二人は東京で結婚した。

### 関口婦美子について

埼玉県出身であり、父は花火作りの名手で知られている関口馬太郎である。馬太郎には



写真5 劉東軒晩年の写真



写真6 婦美子と満喜子の写真

息子一人と娘三人がいた。長女が婦美子であり、次女の満喜子は歯医者で、埼玉でクリニックを開業していた。満喜子は、中国雲南出身の呉氏の嫁になったそうである。

婦美子と劉の婚姻は、家族から反対されたが、自分の意思で中国へ行くことにした。

### 婦美子の中国へ移住した後の状況

婦美子は、劉と劉の故郷・興平県へ戻った。後に西安へ移住し、多くの中国人と仲よくなった。また、西安を訪れる日本人を接待するため、和式の2階建ての建築を造った。加地達の日本人学生がこれを見たため、泣いていたと推察される。

### 羅先生と白肇中との出会い

偶然なのは、私は南京芸術学院で博士課程に進学した際、意外にも上海で加地哲定達が数十年に亘ってずっと探している写真を見つけた。続きに、意外に西安で劉東軒の孫・白肇中と知り合った上、これらの写真および加地哲定、白肇中達の色々なことを知ることができた。

### 写真に標注された時間に対する考察

加地哲定は、1925年6月20日瀟橋を通し西安の長楽門に入り、東大街を通じて端履門街で劉と婦美子の家に泊まったことを記載している。欣喜に思うのは、写真は時間的に加地哲定の記載と完全にあうことである。

一方、加地哲定は「午後劉先生の息子（劉瀛生）が碑林を案内してくれた。夜劉先生は「西安の南門から東南方向の五里に祭台村という在所があり、村には小学校があつて、校内に石仏寺がある。これは古代の青龍寺である。明日見に行かなきゃ……」と記載している。写真7は署名時間と内容は加地哲定の話と一致する一方、写真8は時間的に異なることである。



写真7 碑林周囲にあった孔子廟



写真8 加地による古青龍寺での題字

ところが、集めた資料を通じて、依然よりも加地哲定達の旅行内容の理解が進捗したこ

とであった。写真9は当時の碑林の正面である。碑林と孔子廟との建築的連携があったため、この写真は前の孔子廟と時間は一致するものと考えられる。



写真9 当時の碑林の正門



写真10 現在の碑林博物館

### 西安当時の写真

加地達は、当時の西安城門と城内にある大清真寺や阿房宮など、様々な所の写真を撮っていた。



写真11 西安城



写真12 大清真寺



写真13 阿房宮遺跡



写真14 始皇帝陵

加地達は、咸陽城外にある有名な周公墓（写真15）を見学し、それから陝西南部にある商州（写真16）に入った。



写真15 周公墓



写真16 商州

加地達の撮影旅行の成果の中で、最大のものは私たちに唐・玄宗皇帝戯曲芸術の靈魂を祀るために建てられた、西安驛馬市梨園会館の当時の写真を残してくれたことである。しかし、この問題を研究する専門家達は、未だに会館の画像資料がないため困っているようである。

加地達のカメラは、当時の大、小雁塔の真実を撮った。今日のその周りを比較すると、まったく異なることが分かる。(写真17、18)



写真17 1920年代の大、小雁塔



写真18 現在の大、小雁塔

加地達が撮った曲江流水と白鹿原の写真は、今日「長安八景」と西安の民俗を研究する重要な参考資料となっている。このように、加地達は様々な当時の名勝の風景を撮っていた。

#### 旅行終焉後

旅行参加者達は、その後何回も集まって過去や人生のことなど話し合っている。例えば、1961年秦隴旅行班の加地、藤和、三野などは和歌山県の高野山で集まったことがあり、その間、彼らは当時失った重要な旅行資料のことを思い出したかもしれない。



写真19 高野山での集まり

しかし、数十年後に於いて、今の自分と若い頃中国秦隴旅行していた頃の自分と比較すること自体は困難である。しかし、重要な旅行者の一人・加地哲定は当時のことを何回も家族に言っていたそうである。加地はもう一度中国へ当時のルート歩き、劉東軒先生と家族に会いたがっていた。

しかし、加地のこの願望は生存中には実現できなかった。加地の息子である、後に高野山大学学長になった加地有定が代わりに訪中した。しかし、これは加地哲定が亡くなった

後、相当経った1993年（平成5）のことである。

#### おわりに

現在までも、加地有定を含め当時秦隴大旅行に参加していた子孫達は今日見せた写真を見たことが無く、今日いらっしゃる皆様にこれらの情報を熱心に伝達していただきたい。

劉東軒の娘である劉賢淑は同じく法政大学卒業で西安出身の北洋政府国会議員かつ大統領オフィスの主任を歴任していた白常潔の家族と知り合った。白常潔も日本に留学し、愛知県富家の娘伊藤逸枝子と結婚し、息子・白炳圻を授かっている。

したがって、父は同期で、母は同じく日本人の二人は結婚することになり、これも日中友好の美談となっている。白肇中の体には、二つの中国家庭と日本の二家族の血が流れていると言える。

不幸なのは、当時加地哲定など西安で孔子廟の見学を案内していた劉東軒の息子劉瀛生は、後に天津同文書院に入学したが、1928年に急性伝染病がうつり天津で亡くなった。

孔子廟も1959年に雷に当たり、現存していない。今の碑林に入り、もう存在していない孔子廟の基に立てば、当時劉瀛生が加地哲定達に孔子廟を案内する場面を想像できるだろう。